

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成24年 4月 3日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 霊長類研究所

職 名 助 教

氏 名 辻 大 和

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 研究者交流支援 ・ 外国人研究者招へい助成		
招へいした研究者	所 属 ・ 職 名	ドイツ連邦共和国 マックスプランク進化人類学研究所	
	氏 名	Cyril C Grueter	
研 究 課 題 名	温帯の霊長類の生態学的適応		
招 へ い 期 間	平成24年 2月23日 ～ 平成24年 3月 7日		
招へい成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	225,000 円	
	使用した助成金額	225,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券購入費用	
		国内旅費	
霊長類研究所共同利用宿舎使用料(2/23-3/5)			
	3/5-3/6 の宿泊費用(地獄谷、東京)		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 成果の概要

助成の種類：外国人研究者招へい助成

招へい研究者：Cyril C. Grueter（マックスプランク進化人類学研究所）

申請者：京都大学霊長類研究所 辻大和

### 1. はじめに

今回の招へいの目的は、2010年の国際霊長類学会（京都）で開催したシンポジウム「温帯の霊長類の生態学的適応」の内容を下敷きにした、国際誌の特集号の内容についての打ち合わせである。打ち合わせのメンバーは、先のシンポジウムの企画者でもあった、招へい者のCyril Grueter、半谷吾郎（京都大学霊長類研究所）、そして辻の三名である。特集号では日本、中国、台湾、インド、モロッコ、ネパール、アルゼンチン各国の温帯地域に生息する霊長類についての原著論文8編と、総説論文2編の掲載を予定しており、このうち総説論文では、われわれ三名が共著者となって文献やこの特集号の寄稿者の未発表資料に基づくメタ解析を実施し、

①熱帯と温帯の生息環境の違いについて

②霊長類の食性の違いについて

という二本の論文にまとめることを目指した。総説執筆に際しては著者同士で直接議論できる場を持つことが不可欠であり、また多くの原著論文の原稿の編集作業を効率的に進めるためにも、今回の招へいは有益だと考えられた。

### 2. 共同研究の目的

現生の霊長類は熱帯林を中心に生息しており、温帯は辺境の生息地である。温帯は一般に生息環境の季節変化が熱帯と比べて大きく、しかも一年周期での変動の卓越する環境だとされている。温帯に生息する霊長類の生態については、日本人によるニホンザルの研究が世界をリードする成果をあげてきたが、近年中国など他の地域でも研究が進んでいる。申請者らは、2010年に開催された国際霊長類学会で温帯の霊長類の生態適応に関するシンポジウムを企画し、温帯の霊長類の食性や遊動パターンについて、共通性と系統群による地域差の存在を明らかにした。その後、シンポジウムの成果を国際学術誌に特集号として投稿すべく、企画の準備を進めてきた。温帯が霊長類の生息環境としてどのような特徴をもち、そこに生息する霊長類はどのように対処しなければならないのか、また霊長類の系統群ごとにどのように反応が異なるのかを明らかにすることが共同研究の目的である。

### 3. 成果

実は、今回の招へい助成の申請が採択された後、特集号を組む学術誌の編集委員会から、われわれ三名が特集号の編集に直接関わることはできず、通常通りの査読プロセスを経る旨の連絡があった。特集号の編集打ち合わせが今回の招へいの最大の目的だったため、当初の計画を修正し、Grueterの滞在期間中は、われわれ三人で執筆する総説論文2編の内容にしぼって議論することとした。なお、原著論文8編については、各著者にはわれわれ三名に原稿を送ってもらい、投稿前の内部査読を行うこととし、1月下旬より2月下旬まで内部審査作業を行って、すでに全ての

原著論文の内容の検討を終えている。

招へい者の Cyril Grueter は、予定通り 2012 年 2/23 日に来日した（ライプチヒ→中部国際空港）。翌 24 日より、Grueter・辻・半谷の三名で 2 週間にわたって話し合い、

- ・ 温帯の霊長類の食性や遊動パターンについての情報交換
- ・ 特集号に掲載予定の原著論文の内部査読の方針の確認
- ・ 論文に盛り込む内容の確認
- ・ 特集号に掲載予定の原著論文との議論の整合性の確認

を行った。以上の内容を元に総説論文を書き上げ、現在内部の審査を行っている。

Grueter の滞在期間中、2/28 には霊長類研究所内で社会生態セミナーを開催し、Grueter が現在研究を進めている中国南部のウンナンキンシコウおよびルワンダのマウンテンゴリラについての研究について説明してもらった。また Grueter は 2 週間の滞在中に所内の研究者と個別に研究連絡を行い、キンシコウ、ニホンザル、ゴリラ、テナガザル等に関する意見交換を行った。これらにより、所内の研究員・学生との間で交流を深めることができたようである。

Grueter は 3/5 に霊長類研究所を出発し、研究連絡のために長野県の志賀高原を訪問した。ここで地獄谷野猿公園のニホンザルを観察するとともに、現地の研究者と懇談した。3/7 に東京に移動し、成田国際空港からドイツに帰国した。

このような海外の研究者との交流の機会を与えて下さった京都大学教育研究振興財団に対し、感謝の意を表したい。